

## 私の保育



関 史子

私が『倉橋惣三選集』という本に出会ったのは、幼稚園に初めて勤務してかれこれ五年が過ぎた頃でした。それは学生時代に学んだいろいろな本とは異なり、私にとって極めてショックなものでした。その出会いが五年という保育経験を通して少なからず保育に対して挫折感をもつようになった時だけにその感動は殊更大きかったのかもしれませんが。あるいはまたそれは選集全体に流れる極めて美しい言葉の運びとその精練された内容の奥深さのゆえであったのかもしれない。

特に「子どもの心のはた」、泣かずにいられない心持ち

への共感」、という個所は私の心を大きくかきたて、遂には私に一生の課題を投げかけ私を心酔させたのです。「幼児の自発的生活を尊重すること」、「ひとりひとりの幼児をしっかりと認識すること」、が幼児期の教育の基本的姿勢であり、保育者として常にその原点を確立しておくことが最も重要であることを知りました。私はその当時観念的にはその事を理解できても、実際には何の手がかりもつかめなまま、その後も相変らずそれまでの慣習的な保育に流されていたのです。一クラスの子どもを机の前にきちんと座らせ、その日の計画に従って作業を開始し、絵を描かせ

たり、歌をうたわせたりして、一日を折目正しく過ごすこととそれにより子どもの成長が必然的にはかれ、保育の目的が十分達せられているのだという単純な考え方でその日その日を過ごしてまいりました。実はその時の私には、そのような方法しかわからなかったのです。

保育における主役は幼児でなければならぬということ、百も承知している筈なのに、結果的には私達の保育内容は、教師と母親達の自己満足のためのものに終っていたといえましょう。例えば五月になれば必ずこいのぼりを製作させたり、秋の運動会では整然と並んで画一的に上手に演技させることのみをめざしてまいりました。しかしこのような保育からは一刻も早く脱皮なくてはと心の中では考えていたものの、現実にはどうにも変えることができず悶々の日を過ごしていたのです。ところがある日期せずして「自発的生活を尊重する保育」について教職員全員で話し合いが行なわれました。今迄の私達のやってきた保育の反省をしつつ更に奥深い保育のむずかしさにぶつかり、理想とする保育はいかなるものであろうかと、次から次へと発展し、その話し合いはつきることなく、連日行なわれました。その時の教師は全員が自分たちの保育について前向き

な姿勢で考え、その希望にもえた目はすばらしく輝いていました。その結果、幼稚園全体で保育への共通理解を持つために、今迄の経験やら知識だけでなく、新しい研究や勉強のやり直しをさせてくれる場を設定して、そこで適切な指導を得よう、保育に関する事なら何でも消化し吸収していこうという積極的な意欲が、全教職員的一致するところとなり、偶々募集<sup>なまた</sup>中であつたお茶の水女子大学の現職研究へ参加し全員で通いはじめることになったのです。

そこでは個性豊かな多くの先生方と触れ合うことができ、保育の「い・ろ・は」から考え直す必要性和その原点に立つて考える姿勢を教えられました。まさしく「我が意を得たり」という喜びの心境でした。また数多くの幼稚園の保育を見学させていただく機会に恵まれ、私達が現職研究で学んできた新しいと思っていた理論や理想が、現実の幼稚園で、日常の営みの中に具<sup>ま</sup>さに生かされ、成功しているのを目の前にしたとき、自分たちの識見の狭さに驚くと同時に、ようやく私達の求めてやまなかつた真の保育にめぐり会えたという喜びが込み上げてきました。またその見学や話し合いから、子どもの見方、考え方や、子どもにとつて、いやひとりの人間にとつてと表現した方が適切なのか

もしませんが、自由がいかに尊いものであるか、また子どもが自主的に活動できることを保障するために、自由な時間を多く与えることの大切さ、などを学びとりました。

### 学んだこと、感じたこと、をできるだけ多く取り入れた保育への転換

保育の見直しの中で非常に興味深かったことは、「コペルニクスの転回」という言葉を耳にしたときでした。これは物事を一方からだけでなくむしろ逆の立場からとらえてみることも、時には重要なことだと云うことです。かの古代において天動説から地動説へと移行したとき、人間の思考形態を根底から変えざるを得なかったことは、ご承知の通りです。ちなみに安野光雅氏は『あいうえおの絵本』の中の「にじ」の部分で発想の逆転を用いてふだん私たちが気づかないような物の見方を示しています。そして日常生活の中で大変困難な問題にぶつかった時、これらの例のように、いつもとちがって逆の見方でその問題を考えてみることは解決方法を探す手がかりになるようです。そうした発想で私達の保育を見直してみると、どんな保育が考えられるでしょうか。

それは今迄の教師中心の保育を、これからは子ども中心の保育へと転換してみることに。つまり「自主性を育てる保育」を行なうことに結論づけられました。そこで昭和五十三年度より、園長先生の深いご理解のもとに、一斉保育から、子どもを主体とした「自主性を育てる保育」へと大きく転換し、スタートすることになりました。

この保育は子どもにとっては、今迄のように教師の指示に従って行動するのではなく、自分で考え、自分で選び、自分で決めて行動しなければならぬのですから、かなり厳しいものでした。また教師にとっても、子どもと一緒に遊ぶ中で、育つためのある方向づけをしなくてはならないし、幼児ひとりひとりを徹底的に観察する必要にせまられるものでした。そして生活の教育化が自主性を育てる保育なのです。指導計画ののっとなっていない突発的な事象が非常に多く起こり、それに対する対応指導の問題など、教師としての役割の重大さに遭遇し、今迄以上に教師の力量を問われるようになったことは申すまでもありません。こうして自主性を育てる保育に転換してからの一年間は、子どもも、教師も、悪戦苦闘の連続でしたが、試行錯誤をくりかえしながら、幸にも子どもも、教師も順調に育って

いったのでした。

## 母親からの抵抗

幼稚園は、子どもと教師とのかわり合いが中心ですが、それだけでは成り立たないのもまた事実です。母親ぬきで保育を進めることはできません。その頃、母親から元町幼稚園の保育に対する素朴な質問（「朝から帰りまで遊ばせっぱなしの保育では、小学校へ行ってから困るのではないか」など）が、たびたび私の所へ届きました。これらは、私達に今まで気がつかなかった新しい問題を提起してくれました。以前、私も保育園から帰宅した我が子に対して何気なく「晋一!! 今日保育園で何を教えてもらったの?」と聞いたことがあります。これは、恐らくどの親でも、自分の子どもの成長をはやく知りたい衝動にかられ、口にする言葉ではないでしょうか。いってみればこれが園に通わせる母親たちの素朴な気持なのかもしれません。その時の我が子の返事を今となっては覚えていませんが、今考えると、実に私がおかしな事を口にしたものと、恥ずかしくなります。しかし当時保育の勉強をしていた私でさえ、その言葉が何の抵抗もなく口から出ていたのでした。

ですから前に出てきたような母親の質問は、しごく素朴で当り前のことなのかもしれません。そしてその後もある母親から「自主性を育てる保育はすばらしいすばらしいといつて、喜んでいるのは先生と子ども達ばかりで、私達母親にとって何がすばらしいのだから、今だにわからない」と云われた時、私達教師が自主性を育てる保育の良さをうまく伝えられず、只ひたすら自分達の中だけで、正しいものとして納得していた、所謂自己満足に陥っていたのではないかと気づき、はっとさせられました。

## アンケート調査をしてみる

そこで教師と親との間にある問題をより具体的に探るため、アンケート調査を行なってみました。その中の一つで、「幼稚園の保育で、あなたが疑問に思うことは何ですか。」の問に対して出てきた答えは、やはり学習の問題でした。なぜ文字を教えないことが良い保育なのか疑問です。○ 自主性を育てる保育は賛成するが、先生一人当りのクラスの数が多いので満足するのではないですか（当園ではクラス三十数名）

○ いやなことでも決められた時間はきちっとしていられる

ような指導をしてほしい。

。毎日ブロックだけで遊んでいるが、子どもの興味が片寄  
ってしまわないですか。

。幼稚園の始まりと終りにコールサインをして、生活にけ  
じめをつけてほしい等。

なるほどと思われる疑問が出てきました。

この回答の中で一貫して感じられることは、母親が自分  
の学校生活を思い出し教育の場とはこういうもののはずだ  
といったある先入的な固定概念の中で幼稚園教育のあり方  
を推考しているということです。家庭に居る時は我が子を  
過保護に扱い、幼稚園に行かせると、そこは教育の場だか  
ら、けじめをつけて厳しくしてほしいというように、教育は  
幼稚園だけであるものという錯覚が生じているようです。

また何でも早くから子どもに教えた方が早く身につくこ  
う考え方を持っていることが感じられました。どうやら  
情報が氾濫する中で母親自身がそれをうまく処理できずに  
混乱しているようです。このようなアンケートによって現  
代の若い母親の一般的な意識を集約することができました

## アンケートを生かした母親への働きかけ

前に述べたアンケートにもとづいて、それをどうやって  
実際に生かしたらよいか、職員同志の十分な話し合いの中  
から次のような四つの問題点が出てきました。

一、母親が疑問を気軽に口に出せるよう、日常親しく会話  
を交すようにすること。

二、今までの個人面談は一人十分程度で済ませていたが、  
三十分に延長し、子どもの問題や、保育に対する疑問  
を母親から聞き納得できるよう説明する。

三、元町幼稚園の保育を理解してもらうために入園から卒  
業までの二年間に渡り、母親と教師との理解を深める  
ためのカリキュラムが必要であること。(いつ、どん  
な時に、遊び(活動)をスライドで見せ、その意義を  
話したらよいか、また個人面談や懇談会はいつ頃、何  
回位実施すべきかといったもの)。

四、作品展を絵画製作の面だけをとりあげた表面的なもの  
から、生活展という名に改め、幼稚園での子どもの生  
活のすべてを展示するという方法を取り、展示物は目  
に見える作品だけでなく、形では残らない、いろいろな  
遊び(活動)Ⅱ(戸外での遊び、ままごと、ごっこ遊び、  
ブロック遊び)等を、写真にとりて展示し、子どもた

ちひとりひとりの発達を理解してもらうために現在に至るまでの過程や、その時の子どもの状態がわかるよう、その作品一つ一つに説明を加え、解説書を作成し母親に渡すこと。

三の母親と教師のためのカリキュラムについてはまだ検討中ですが、他の三つのことについては既の実施をいたしました。今まで不安を持っていた母親も卒業時には、

「この幼稚園に入園させて本当に良かった」

「私の友達にもこの幼稚園をすすめたい」

「子どもに集中力が身についた」

「子ども同志で工夫して長い時間遊ぶ」

と云った話が聞かれました。教師の子どもに対する熱意と我が子の成長を確かなものとして受け止めたのでしょう。

また近所の小学校の教師から「元町幼稚園卒業の子どもたちは総じて、興味をもった事に対しては、非常に意欲的であるが、興味の無いものに対しては決して乗ってこない。抜にくい点はあるが、自分をしっかりもっている。また障害をもった子どもに対して自然な触れ合いで接し、おもしろいのある子どもが育っている。小学校でも良い所

はそのまま伸ばしてやりたいし、芽を摘んでしまいたくないので、どういう保育をしているのか、一度見せてほしい」との申し出があり、私達の保育を善意をもって認めて頂いた時、職員目に光るものがあつたのを忘れることができません。

しかし四月になればまた新しい子どもたちが入園すると共に、新しい母親とのかかわりあいが生じてまいります。そしてまたアンケートに出てきたような疑問もたくさん出てくることも予測されます。そうした母親に私達は根気強く、親と教師が共通理解を得て、はじめて成り立つ保育を行なっていることを説き、元町幼稚園で行なっている保育が子ども長い人生においてきわめて重大な意味をもっている事を親と共に私達も確信していきたいのです。

まさに「自主性を育てる保育」とは、子どもに対して、その母親に対しても、教師は想像以上の根気を必要とするものです。私達はこれからも「継続は力なり」という言葉を信じて繰り返し繰り返し、より多くの人たちに「自主性を育てる保育」のよさを理解してもらい一隅を照らす燈として、たゆまぬ努力を続けてゆきたいと思えます。

(横浜学園附属元町幼稚園)